

ロビン・M・ウィリアムズ著『アメリカ社会——その
社会学的解明——』

Robin M. Williams, Jr., *American Society: A Sociological Interpretation* (third edition), Alfred A. Knopf, New York, 1970, xvii+639 pp.

近年、社会学の理論と実証的分析方法の発達著しいが、その成果の多くは全体社会(society as a whole)の諸下位システムを個別に対象としたものであり、それらの全体的関連性を取り扱うマクロ社会学の発達は比較的遅れているとって過言でない。

しかしながら、昨今、(1)開発途上国の経済・社会発展問題に対する“開発社会学(sociology of development)”への関心、(2)高度産業社会の趨勢と“脱産業社会(post-industrial society)”への未来学的関心、(3)社会変動の測定、社会開発への要求と結びついた“社会指標(social indicators)”体系化の試み、等に見られるごとく、トータル・システムとしての全体社会への関心の昂まりとともに、その社会学的分析理論の必要性はとみに増大している。

本書は、アメリカ社会という全体社会の具体的ケースをとりあげ、その構造とダイナミズムを、Talcott Parsons等によって発展させられた構造機能分析(structural-functional analysis)的社会学理論の概念枠を駆使して分析してみせたユニークな研究書である。本書の概要と構成は次のとおりである。

全体社会にとっては物理的・生物的環境は与件として重要ではあるが、社会のヴァリエーションはそれだけでは説明されない(第II章「地理・資源・人口」)。

社会における人間行動の相互作用には一定の構造、すなわち反復的・予測可能的パターンがみられる。その構造の中核的概念は制度(institutions)、すなわち「ある重要な価値をめぐる一組の制度的規範の集まり」である。その規範は、パーソナリティへの内面化と社会的制裁の二つのメカニズムによって維持されている(第III章「分析の問題」)。

本書の前半部分は、この制度概念および役割・地位(role-status)概念を用いて、アメリカ社会の構造上の特質、すなわち高度に構造分化の進んだ社会の機能的諸下位システムとそれらの相互連関の分析を行なっている(第IV章「親族と家族」、第V章「社会成層」、第VI章「経済制度」、第VII章「政治制度」、第VIII章「教育」、第IX章「宗教」)。

アメリカのごとき大規模社会は、種々な下位文化が併存し、対立する価値、規範を許容しうる構造的柔軟性をもつ(第X章「制度的多様性」)。他方、制度的構造の安定性は、パーソナリティに内面化された価値によって支えられている。全体社会における「支配的価値」の存在を仮定することは可能である(第XI章「価値」)。

社会における人間行動のパターンは、制度的規範に加えて社会組織・集団によっても規定される。分析的には、前者は文化体系レベルの問題、後者は社会体系レベルの問題である(第XII章「社会組織」)。個々の制度、社会組織は相互に密接に関連しており、全体社会の分析には構造の相互連関分析が不可欠である(第XIII章「制度・集団の相互関係」)。

全体社会の統合状態は多くのメカニズムを通じて保たれている。統合性の崩壊はアノミー、疎外現象を生み出す(第XIV章「統合」)。また、制度的構造は時間の経過とともに変化する。本書の最終章は、この社会的・文化的変動の問題を扱っている(第XV章「社会的・文化的変動」)。

本書は、社会変動の議論において若干粗略の感は否めぬとはいえ、比較的科学的取り扱いの困難な社会の価値・規範構造に真正面から取り組み、構造=機能分析的方法の有効性をアメリカ社会について見事に立証してみせた。我が国社会については、本書のごとき本格的な社会学的分析書はほとんど皆無である。それは我が国社会学者に残された大きな課題とってよからう。(野原 誠)